

下懸遺跡から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

愛知県安城市小川町に所在する下懸遺跡は、鹿乗川の左岸に位置する。ここでは、弥生時代から古代の自然流路から出土した大型植物遺体の同定結果を報告し、食用などとして利用された植物や、遺跡周辺における栽培状況および植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、肉眼で確認され、取り上げられた69試料である。採取されたのは、自然流路の001NR (グリッド5E41の3a層とグリッド5E51の3a層、グリッド5E5mの1層)、026NR (グリッド5E19pの3b層とグリッド5E20pの2b層、3層、3b層、3c層、グリッド5E20qの2b層、3b層、グリッド6E1pの3b層、グリッド6E1qの2a層、2b層、3b層、3c層、グリッド6E2qの2層、3層(トレンチ1)、3層(トレンチ2)、3層、グリッド6E3qのベルト14、3層)、グリッド6E1pの検2である。遺構の時期は、いずれも弥生時代末～古墳時代初頭である。自然流路の下層は極めて植物質の多い褐色系の粘土で、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が出土し、上層は黒色系の粘土で、植物質は下層に比べて減少し、奈良時代～平安時代の遺物が出土する。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその数を記号で表記した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のモモ核とクリ果実、スダジイ果実、ナラガシワ果実、コナラ属アカガシ亜属果実、コナラ属果実、オニグルミ核の7分類群、草本植物では、ヒョウタン仲間果実とヒシ属果実の2分類群の、計9分類群が見いだされた。この他に、不明の昆虫遺体が見られたが、

表1 下懸遺跡から出土した大型植物遺体 (1) (括弧内は破片数)

分類群	層位 時期	グリッド													
		5E41		5E51		5E5m		5E19p		5E20p		5E20q		6E1p	
		001NR		001NR		001NR		026NR		026NR		検2		026NR	
		3a		1		3b	2b	3	3b	3c	2b	3b	-	3b	
		弥生時代末～古墳時代初頭													
モモ	核										1	2	1	1	
クリ	果実			(2)				(2)	3 (4)			(14)			
スダジイ	果実				1										
ナラガシワ	果実	1	1									1			
オニグルミ	核									1		(1)			
ヒョウタン仲間	果実				(5)		(8)								
ヒシ属	果実						(1)								
不明	昆虫遺体						(+)								

+:1-9

表2 下懸遺跡から出土した大型植物遺体 (2) (括弧内は破片数)

分類群	層位 時期	グリッド									
		6E1q				6E2q			6E3q		
		026NR		026NR		026NR		026NR		026NR	
		2a	2b	3b	3c	2	3(トレンチ 1)	3(トレンチ 2)	3	ベルト 14	3
		弥生時代末～古墳時代初頭									
モモ	核			2							
クリ	果実			2 (24)	(4)		1	(4)	1 (26)	(6)	1 (15)
コナラ属アカガシ亜属	果実			1							
コナラ属	果実			(1)							
オニグルミ	核				1						
ヒョウタン仲間	果実		(5)								
ヒシ属	果実		(14)			(4)					

同定の対象外とした (表 1、2)。

以下、産出した主な種実について遺構別に記載する。

001NR：クリとナラガシワがわずかに得られた。

026NR：クリがやや多く、ヒョウタン仲間とヒシ属が少量、モモとスタジイ、ナラガシワ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、オニグルミがわずかに得られた。

検 2：モモがわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1)モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は円形で先端が緩やかに突出する。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。図版に示した核の大きさは、高さ 22.2mm、幅 21.8mm、厚さ 15.7mm。完形個体 7 点の大きさは、高さ 21.1~25.1 (平均 22.4±1.4) mm、幅 18.0~22.8 (平均 20.4±1.8) mm、厚さ 15.2~17.2 (平均 15.9±0.7) mm (表 3)。

表3 モモ核の大きさ (単位: mm)

	高さ	幅	厚さ
	21.4	19.6	15.8
5E20q	25.1	21.6	16.7
	22.4	18.5	15.6
6E1p	23.3	22.8	17.2
	21.1	18.0	15.2
6E1q	22.2	21.8	15.7
	21.1	20.5	15.3
最小	21.1	18.0	15.2
最大	25.1	22.8	17.2
平均	22.4	20.4	15.9
標準偏差	1.4	1.8	0.7

(2)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実 ブナ科

黒色で、側面は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。基部に広い殻斗着痕がある。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。高さ 24.8mm、幅 32.0mm、厚さ 9.5mm。

(3)スタジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba 果実 ブナ科

暗褐色で、完形ならば卵形、上部は幅が徐々に狭くなる。縦の条線が目立つ。残存高 9.6mm、幅 8.1mm。

(4)ナラガシワ *Quercus aliena* Blume 果実 ブナ科

暗褐色で長楕円体、コナラより大きく寸胴。中心よりも下方に最大幅があり、側面観は逆 U 字形になる。上部はやや平ら。臍は大きく平坦な形状を呈すが、中央部がやや尖るものが多い。高さ 31.0mm、幅 19.7mm。

(5)コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果実 ブナ科

暗褐色で、楕円体。表面に縦筋がある。突出部はなだらかな円錐状のため、イチイガシの可能性が高い。高さ 13.3mm、幅 12.8mm。

(6)コナラ属 *Quercus* spp. 果実 ブナ科

暗褐色で、完形ならば楕円体か。クヌギ節やコナラ節、アカガシ亜属に分類できない一群は、コナラ属とした。縦の条線が目立つ。残存高 13.2mm、残存幅 8.5mm。

(7)オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 核 クルミ科

黄褐色で、広卵形。壁は緻密で硬く、壁面は鋭利である。表面に浅い溝と凹凸が不規則に入る。図版 1-7 は高さ 35.3mm、幅 27.3mm、厚さ 23.9mm、図版 1-8 は高さ 32.3mm、幅 28.6mm、厚さ 25.5mm、図版 1-9 は高さ 28.7mm、幅 25.0mm、残存厚 11.5mm。

(8)ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 果実 ウリ科

黄褐色で、完形ならば円筒形。上面観は円形で、表面は平滑。蒂 (へた) が残っている。壁は厚い。

残存長 86.4mm、残存幅 47.6mm、厚さ 7.6mm。

(9)ヒシ属 *Trapa* spp. 果実 ヒシ科

暗褐色で、完形ならば不整三角形。細く先端が尖った角がのびる。上位角は太く鋭い。残存長 7.3mm、残存幅 9.2mm。

4. 考察

下懸遺跡の弥生時代末～古墳時代初頭の遺構から出土した大型植物遺体を同定した結果、種実を中心とする大型植物遺体が得られた。肉眼で確認され、取り上げされた種実は全て食用可能な種実であった。野生植物では、クリとドングリ類（スダジイ、ナラガシワ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属）、オニグルミ、ヒシ属が得られた。栽培植物ではモモとヒョウタン仲間が得られた。オニグルミの半割の個体には打撃痕は見られず、自然に割れた可能性がある。ナラガシワは頂部が欠損して潰れており、食用目的で子葉を取り出すために割られた可能性がある。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代では核長が 2.46～2.65cm と比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は 2.36～2.66cm で、鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長 2.69cm、最大で 3.8cm 程度の核がみられるとしている。今回、下懸遺跡から出土したモモ核の完形個体 7 点の大きさは、長さ平均 2.24 ± 0.14 cm、幅平均 2.04 ± 0.18 cm で、弥生時代の平均値よりも小さく、丸味が強いタイプであった。小清水（1962）は、核長の平均から栽培モモは 2.9cm 程度、ノモモは 2.1cm 程度、コダイモモは 1.9cm 程度と分類しており、栽培モモが大型で長く扁平であるのに対して、コダイモモは小型で球状を呈するとしている。今回、自然流路などから出土したモモ核の大きさは、栽培モモとノモモの間の大きさで、球状に近いタイプがみられた。モモは食用として利用される可能性のほか、祭祀に伴って自然流路に堆積した可能性もある。

引用文献

小清水卓二（1962）古代日本の住居から出土する桃核について．榎原考古学研究所編「近畿古文化論 攷」：559-568，吉川弘文館．

新津 健（1999）遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—．山梨考古学論集 IV，361-374，山梨県考古学協会．

米倉浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名—学名インデックス (YList)，<http://ylist.info>



スケール 1-9, 11:5mm, 10:10mm

図版1 下懸遺跡から出土した大型植物遺体

1. モモ核 (6E1q, 026NR, 3b層)、2. クリ果実 (6E1q, 026NR, 3b層)、3. スダジイ果実 (5E19p, 026NR, 3b層)、4. ナラガシワ果実 (5E20q, 026NR, 3b層)、5. コナラ属アカガシ亜属果実 (6E1q, 026NR, 3b層)、6. コナラ属果実 (6E1q, 026NR, 3b層)、7. オニグルミ核 (6E1q, 026NR, 3c層)、8. オニグルミ核 (5E20p, 026NR, 3c層)、9. オニグルミ核 (5E20q, 026NR, 3b層)、10. ヒョウタン仲間果実 (5E19p, 026NR, 3b層)、11. ヒシ属果実 (5E20p, 026NR, 2b層)